The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	上代文學に佛教がどのように表出せられてゐるか
Author(s)	八木, 毅
Citation	懐徳. 1959, 30, p. 62-67
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90338
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

上代文學に佛教がどのやうに表出せられてゐるか

八木　毅

日本書紀がつたへてゐる蘇我、物部兩氏のはげしい葛藤は、結局純粋な宗教上の命題に起因するといふよりは、崇佛、排佛に名をかりての權力爭奪のたたかひであつたと見た方がよい。

壯大な外觀、莊嚴な內容をもつて渡來してきた佛教文化は、國粹主義による多少の抵抗はあつたものの、もともと精神構造の內部において空白をかこつてゐた上代知識人の間に、それが受容されぬはずがなかつた。

上代における佛教は、渡來後約二百年の間に、朝廷權力との間に鞏固なむすびつきをえたのであつて、その間、佛教教義や、その世界觀に對する共鳴を文學のかたちで示すものもあつた。萬葉集にそれを見る。

太宰帥大伴の卿、凶問に報ふる歌一首

禍故重疊し、凶問累に集る。永く崩心の悲を懷き、獨り斷腸の泣を流す。但兩君の大助に依りて、傾命纔に繼ぐ耳。筆言を盡さず、古今の歎く所なり。

世の中は　空しきものと　知る時し　いよよますます　悲しかりけり

〔五卷七五三〕

題詞によれば、大伴旅人が、太宰府の長官として九州にある時、不幸が重なつて、凶事の報せが頻りに集つた。その報せに對して、答へてやつた手紙に書かれたものが、この歌であらうと思はれる。この歌の生れた具體的な事情が明瞭ではないのだが、作者旅人が、一大不幸に遭遇して、人生とは何ぞやといふことを、つきつめて考へねばならなくなつた時に、作つたものであると思はれる。

さうした思索の時にあつて、思索の根底となるものは佛教が示す世界觀であつた。佛教の無常思想にもとづいて、世の中の無常と空虛とを思ひしつた時に、彼はあらためて、しみじみとした、悲しみを感じたといふのである。

世間の無常を厭ふ歌二首

生き死にの　二つの海を　厭はしみ　潮干の山を
しぬびつるかも〔十六卷三八四九〕

世の中の　しげき借廬に　住み住みて　至らむ國
のたづき知らずも　〔同三八五〇〕

この二首の歌は、その左注によつて、河原寺の佛堂の裡にある倭琴の面に書かれてゐたものであることがわかり、佛門にある作者が、人生を無常と觀ずる佛教思想を、そのままに受けいれて詠作したといふことは明らかである。

前の歌に、「生き死にの　二つの海」とあるのは、契沖が代匠記に指摘してゐるやうに、華嚴經に、人間世界を「生死海」と表現してゐるのであるが、この歌で言ふところが、生の海と、死の海と、二海洋ありと考へてゐるか、二つの海でなく、海は一つで、そこに生と死といふ現象が無常にも起つてゐる、といふことをかくの如くに表現したのか、これは森本治吉博士の指摘せられてゐるやうに後者であると思はれ、生と死との二つの苦しみのある人間の世界がいやだから、生死の世界を超越した不變常樂の世界（涅槃山）を戀しく思ふことだ、といふのである。

後の歌は、さうした志向をもちながらも、現世の煩惱が多くて、彼岸の世界へ到達することの困難であることを歎いてゐるものであると思はれる。

人間世界の煩惱をたちきることは、まことに困難である。佛道にいつたん歸依したものでも大きな過誤を犯すことがある。

世の中を　何に譬へむ　朝びらき　榜ぎ去し船の
跡なきごとし　〔三卷三五一〕

といふ沙彌滿誓の歌が、大伴旅人の讃酒歌につづいて出てゐる。

美濃の國守であつた笠朝臣麻呂の略歴を拾ふと、慶雲元年正月、正六位下から從五位下になり、後三年七月美濃守となり、和銅二年九月その政績を賞せられ、七年二月吉蘇路の開通により封戸、田地を賜ひ、靈龜二年六月兼尾張守となり、養老三年七月尾張參河信濃三國の按察使となり、四年十月に右大辨となつた。かく顯榮をえた彼の胸中には、朝恩に對する感謝の念の大いなるもののあつたことが察せられるのである。ところが養老五年、先帝の元明天皇が御病氣にかかられたので、笠麻呂はそのために出家せんことを請ひ、許されて僧となり、滿誓と號した。

彼は養老七年、觀世音寺を造立のために筑紫に赴き、そこで大伴旅人と交游することになつた。

寺院の經濟は、不輸租田たる寺田を保有することによつて主として支へられてゐた。それらの寺田の生産力を維持したものは、いはゆる賤民階級の家人、奴婢のたぐひであつた。自身の生活をもたぬ、奴隷である。通婚を禁ぜられてゐる賤民である。觀世音寺は官寺であり、いふまでもなく、寺田も奴隷もあつた。遠來の出家、沙彌滿誓は、筑紫に來、旅人の頽唐趣味に接し、孤獨であるうちに、寺の家人の中に、容貌の端正なのがゐるのに氣づいた。人目を忍ぶ逢瀨を重ねてゐる間に子供が出來た。三代實錄、貞觀八年三月四日の記事によれば、出來た子供は一人ではなかつたらしい。出家としては、だらしのないことである。滿誓が萬葉集に、ひとかどの文學者らしく戀の歌をものこしてゐる。その彼に、半僧半俗の佛道者としての懺悔錄がのこらず、史料の考證（武田祐吉博士「國文學研究　萬葉集篇」沙彌滿誓）から、かうしたことが明るみに出ることは彼自身としても遺憾なことであらうと思ふ。

令の制度によると、寺院は治部省の管轄で、玄蕃寮が「蕃客辭見讌饗送迎及在京夷狄監當館舍事」などと共に管掌してゐた。しかし、宗教上のことは、さうした外務省のやうな役所の行政官では處理しがたい點が多かつたので、僧尼令に所謂僧綱制度を設けて、これらの方面の秩序を保持した。また畿外諸國では、地方官たる國司が行政上、寺院を監察してゐた。寺院には、皇族や皇臣たちが賜ふやうな食封は與へられなかつた。しかし前述のごとく、寺院の經濟は寺田の施入によつて主として支へられた。（續日本紀、天平十三年の詔）大寶令の僧尼令をみても、いかに佛教寺院が權力の保護下におかれてゐたかといふことがわかるのである。

佛教が朝廷の崇敬を受け、奈良時代に入ると政教一致の政策が進み、遂に右にふれたやうな天平十三年の國分寺條令にまで進む。（魚澄惣五郎博士「古社寺の研究」王朝時代の寺院制度と國分寺の興廢および辻善之助博士「日本佛教史之研究」國分寺考參照）このやうに國家の力で保護せられると、日頃、佛教寺院の內部における墮落を見聞してゐる知識人たちの間に、佛教に對する戲謔的な態度が生じてくる。

佛造る　眞朱足らずば　水たまる　池田の朝臣が
鼻の上をほれ　〔十六卷三八四一〕

ここには佛に對する崇敬の念も、神祕とする精神もない。

法師らが　髮の剃杭　馬つなぎ　いたくなひきそ
僧はなかむ　〔同三八四六〕

これは題詞に、はつきり「戯に僧を嗤ふ歌」とあり、法師の無精髭を、杭に見立て、剃杭といつてゐるのである。痛快な歌である。

それに答へて法師の歌がある。

檀越や　然もな言ひそ　里長が　課役はたらば　汝もなかむ　〔同三八四七〕

さきの歌のユーモアに對して、坊主には、やはりムキになつたところがある。金持の檀越をやつつけるのに、税金をもち出したりして、そのこころのかたさをあらはしてゐる。

東大寺の大佛開眼に際して、開眼師として迎へられた菩提仙那は、天平八年、遣唐使の歸朝に伴つて來朝し、大安寺に住してゐた。彼の生活を取りいれて作られた戯謔歌。

婆羅門の　作れる小田を　喫む鳥　瞼腫れて　幡幢にをり　〔同三八五六〕

高宮王が「婆羅門」「田」「鳥」「瞼」「幡幢」など數種の物名を詠みこんでゐるところにこの歌の特色があるのだが、第四句、佛教の影響が鳥獸にまで及ぶといふ思想のあることを指摘せられたのは森本博士（「萬葉集の精神と釋義」外來思想）であつた。

古代インドにおいて侵略者であつたインドアーリアンは豐沃なガンガー流域を占めて、ゆたかな農耕文化を築き、祭官階級（ブラーフマン）は武士階級（クシャトリヤ）と結んで庶民階級（ヴァイシャ）および被征服民の奴隷階級（スードラ）の膏血を絞つた。インドにおける佛教とはさうした所謂カースト制度の背景をもつて、五世紀頃まで繁榮した宗教である。婆羅門とは右のブラーフマンの謂である。佛教が早く、インドから退けられる運命に遭つたのは、平等思想にたち、社會的にはカーストを否定しようとする方向をとるからであつた。アーリア的なバラモン教から八世紀以降のヒンドゥ教に至るまで、カースト制度の維持に最も眞劍にとりくんできたのは、いふまでもなくブラーフマンである。佛教が、そのやうに理想主義的な、社會正義と平等思想とをもつて生ひ立ちながら、わが國に入つたそれは、權力とむすびついて本來的な實踐性を喪失すること多く、寺田に奴隷を使役して悲慘な人生を多數の人間に強いたことは武田博士が「東大寺の奴隷」（前掲書所收）に述べられた通りである。

自ら否定したために、生ひ立ちの國を追ひ出された佛教が、東漸してわが國に根を下ろすや、その否定したものを彼ら自身に持つたといふことは、何たる矛盾であらう。

いつとき萬葉集には、上は天皇から、下は乞食に至る

まで、あらゆる階層の人間の心の歌がとりいれられてある、と學問以外の領域で宣傳された。そして、上代文化は、當時の一般庶民にまで、廣く普及してゐたかの如くに、思はせられたことがあつた。しかしいま、落ちついた眼で萬葉集を讀む人は、誰も然樣なことが、本當だと思つてゐない。あくまで貴族の歌の集である。少數の庶民の作品や歌謠は、いづれも貴族の手を通じてとりいれられたものにすぎない。最大多數の庶民は、無智だつたわけである。

そんな彼らの前に、きらびやなか佛教文化の裝ひをこらして、新しい思想の注入が行はれた。それは机に向つて思索するといつた生まやさしいことがらではなく、彼らの社會的地位や、生活の根據となる生產手段を、ごつそり否定しまふ、おそるべき火焰放射機であつた。

そのひとつの例を日本靈異記から引いて示すことにする。

日本靈異記上卷に、「幼き時より網をもちて魚を捕り、現に惡報を得る緣第十一」といふのがある。

話の大要は次のやうである。

播磨の國揖磨の郡濃於寺に、奈良元興寺の高僧、慈應を招いて法華經を講じてもらつたことがあつた。ちやうどその時、濃於寺の近くに住まふ漁夫が、その家の內になつてゐる桑畑に展轉反側して「やけ死ぬ！　やけ死ぬ！」と叫んで苦しんでゐた。家人が助けようとしてゆくと「あつちへいつてくれ、おれはもう燒け死にさうなんだ」といふ。その親が、びつくりして寺にかけこみ、折柄逗留してゐた慈應に「どうしたものでござりませう」とうかがひをたてたところ、高僧は、おもむろに咒文を唱へてゐたが、その間に、桑畑の漁夫の死の苦しみは、けろつとなほり、ただズボンを燒いただけで助かつた。高僧は、彼がそのやうなめに遭ふのは、幼い時から、長ずるまで、網をうつて魚をとるをわざとしたからである、と戒しめ、大衆の中で、その罪の懺悔と改心とを行はしめた。漁夫は以後、『また惡を行はず』

とある。ここでは、漁夫が網でもつて魚をとるといふ生產手段が『惡』であると斷定し、そのことを『大衆』の中で、漁夫の口を通じて言はしめてゐるのである。

佛教者が、このやうな教理を持ち出すまでは、わが國の漁業者は、罪人ではなく、その多くは安曇氏、海部氏に所屬する百姓だつたのである。彼らは農耕者や貴族や朝廷に、日々の糧を供する良民だつたのである。彼らの生產物は、古事記上卷「猿女の君」の傳來の章以下に見えるやうに『鰭の廣物、鰭の狹物』（大小の魚の意）

とたたへ稱されたものだつたのである。佛教といふ農耕文化の、漁撈文化に對する壓迫である。

これに類する話は、日本靈異記中卷の「常に鳥の卵(かひこ)を煮て食ひて、現に惡死の報を得る緣第十」にもある。

日本靈異記の說話を讀めば奈良時代から、平安初期にかけてのわが國佛教の最盛期に、寺院の裡において行はれた所謂唱導文學が、如何に荒唐無稽のものであつたかが判るであらう。それは、わが國佛教の、ヴァイタルな不合理性の一面を示すものである、といふべきである。